

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・中島慶二

はじめに

二〇二〇年一月に始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、私たちの社会的活動に大きな影響を与えたが、江戸川大学も例外ではなく、学生たちの学びは深刻な状況にさらされた。今回は、私の経験から新型コロナウイルス感染症対策がもたらした大学のフィールド実習への影響について報告する。

本学の現代社会学科（定員八〇）では、従来から現場での学びを重視してきた。一年で参加するフィールド研修では、各教員が実施する全二〇の日帰りプログラムうちの四回に参加し、現場での体験を通じてフィールドや調査に慣れさせる。二年三年では国内・海外の数泊の宿泊を伴う研修旅行プログラムに参加し、専門的な知識と経験を積み上げていく。二年

以上のゼミナールでは、自主的な調査活動を企画させたり調査を実施させたりして現場調査力をつけていくといった具合だ。

大学全体の感染対策

フィールドでの実習云々の前に、大学全体の感染対策について触れておきたい。本学では年度開始以降の行事、入学式や親睦を深める一学年向け野外イベントがほぼすべて中止となり、パソコンの貸与は郵送で行われるなど、ガイダンスや授業、ゼミはすべてオンラインで行われ、結果として前期を通じて、学生たちは健康診断以外で大学へ来ることはなかった。

後期には、社会全体の感染状況の落ち着きを受けて、学生たちが大学構内に入ることが可能になった。自動検温器の設置、手洗い用流し台の増設、こまめな消毒清掃

などの基礎的対策がなされ、教室における定員管理や換気などによる三密対策をとった上で授業が可能な科目については、対面授業プラスリモート授業のハイブリッド方式を原則とし、通常の学校運営に近付けるための努力が続いた。ただし後期の最後には、大学での感染者の発生、社会全体の第三波や緊急事態宣言の再発出などによって、一時的に全面入構禁止に逆戻りするなど、感染状況と対策の進展が目まぐるしく変化した。

コロナ禍で
実習はできたのか

大学への入構禁止措置や、県外への移動自粛などの学外状況を受けて、一年向けの日帰りプログラムによるフィールド研修はすべてオンライン授業となった。現地で学生に対して直接指導することはできなかったが、「フィールド」や「調べる行為」に親しませるためのいくつかの工夫がなされた。学生がそれぞれ単独で、住居から徒歩圏内で行ける場所に実際に çıkかけてもらい、簡単な調査をしてレポートを書かせるといったものや、ネット上のサイトで情報を調

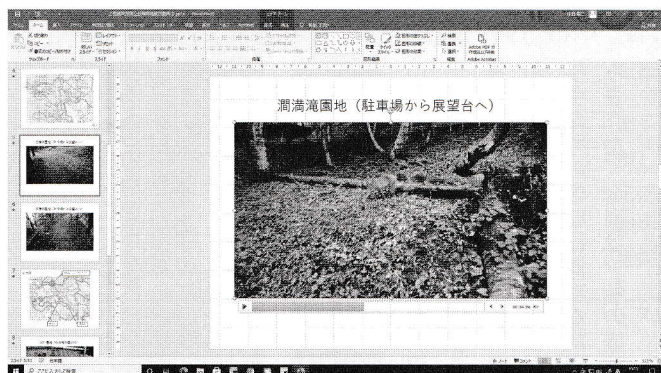
べさせるものなどである。

一方、二年三年向けの宿泊を伴う遠隔地への国内海外研修旅行プログラムはすべて中止となった。飲食を伴わなければ旅行自体には感染リスクはさほど大きくないという専門家の見解表明があったものの、海外渡航の困難さ、人が動くことによる他人との接触機会の増加、無症状感染者の増加、そのほか特に年度始めの時期、情報が少ない中での判断の困難さなどが影響して、今年度は開講しないとすることになったのである。学生は、二〇二〇年度にはこれらの学びはできなかったのである。

このほか各ゼミにおける実習については、おおむね、自宅からの移動が大きくないものは工夫しながら実施し、遠隔地への宿泊を伴うものは中止という結果となった。

国立公園
オンライン実習

筆者が他の教員と共同で運営している二年のゼミでは、当初、日光国立公園（筆者）と尾瀬国立公園（別教員）の現地にそれぞれ行き、現場でさまざまな学習を実施する予定だったが、これらは中止



オンデマンド配信用動画教材ファイル

した。代わりに筆者が前期に実施したのは、国立公園の現地で歩きながら小型カメラで音声入り動画を撮影し、PCのアプリ（パワーポイント）で地図などを付加して動画付きファイルを作成させて学習管理システム（Google Classroom）で共有、オンデマンド方式（学生が各自ダウンロードして視聴する）で配信するというやり方である（画像参照）。

現場での撮影がやり直しできない不便さはあるが、風景や植生、

施設を撮影しながら解説するので、学生が単独で出かけるやり方に比べれば、理解が深まる利点はあるだろう。しかし、撮影した動画を編集したり、パワーポイントのファイルを作成したりするのに手間がかかること、また、リアルタイムに学生が質問したりすることができない（双方向性が保たれない）のが、このやり方の大きな欠点である。

二〇二〇年度は、このやり方以外にはできなかったが、コロナ感染症対策が今後も続いていく可能性を考えると、もっと効果的な方法を模索していかなければならないと感じている。

フィールド実習の本旨

新型コロナウイルス感染症の拡大という人が集まること自体、すなわち社会の成り立ちの根底がリスクとなるこれまで経験のない事態に直面し、企業をはじめ社会経済活動を担っている組織団体は多くの対応を余儀なくされた。酒類の提供を伴う飲食店などはクラスター発生源とみなされ壊滅的な影響を受ける一方、インターネットを活用し

た会議や情報のやり取りに適した業種は、コロナ禍においても何とか事業を継続することができた。大学も、大きく分類すればコロナ禍でも事業が継続可能だった事業種にあたる。文部科学省の調査によれば、二〇二〇年七月一日における大学等の授業の実施方法は、対面と遠隔の併用が六割、対面が二割弱、遠隔が二割強という状況ではあるが、授業の実施そのものは一〇〇％確保されている。

こういった数字だけを見れば、大学での事業継続は何となくうまくいったと思われるかもしれないが、フィールドでの実習や実験など、五感をフルに利用して体験を基に学びを進めるものにあつては、ここまで見てきたように、相当に苦戦を強いられている。

大学の授業とは別に、自然公園財団上高地支部におけるインターンシップで公園管理業務を体験することができた学生もいた。彼らはやはりオンライン授業では経験できない学びを体験できたと語っていた。フィールドでの学び体験はやはりオンライン学習には代えたいものである。

おわりに

情報の伝達のみが学びの本質ではなく、むしろ自ら問題を発見し解決策を批判的に検討する力を養うのが高等教育の教育力だとすれば、また、そのためのフィールド実習だとすれば、少し大げさだがそのことは今回のコロナ禍によって大きなダメージを受けたと考えるべきだろう。

国立公園などの保護地域や自然保護を学習テーマにしている私のゼミなど、現場に立つこと、フィールドで学ぶことを標榜しているところは、新型コロナウイルス感染症による影響をもろに受けてしまった。この反省を踏まえ、今後も工夫を重ねて、フィールドでの学びの復活に向けてさらに努力していく必要がある。

中島 慶二 ● なかじま けいじ

一九八四年環境庁入庁。日光、尾瀬、阿蘇、大雪山などの現地管理業務、長崎県庁、那覇事務所長、復興庁、野生生物課長などを歴任。退官後二〇一七年より江戸川大学国立公園研究所長。